

## 25. 天災は忘れたころにやって来る

この有名な言葉は寺田寅彦が「天災と国防」という著書の中で記述されているものです。よく考えると、なぜ天災と国防が並列して述べられているのか不思議な気がします。

それは自然と人為ということでもあるのですが、自然による影響は努力することで、最小にすることはできても、自然現象そのものをコントロールは出来ませんし抑止など不可能なことです。一方、人為的なことは、その気になればどうにでもなるもので、進むことも退くことも自由です。一見対照的にも見えるものでも、力づくに頼らないで知恵や工夫をすることで影響を少なくすることが可能で、そうすべきことであるということを示されたのではないかと勝手に思っています。

古来、日本列島での暮らしは自然災害との戦いであつたように思われますし、今でもそうだと思います。天災は避けられず、神仏にすがって難を逃れるということもしながら、いかにしてかわすかを考えてきました。つまり、自然のエネルギーを受け流したり受け入れたりするというを上手に利用してきたように思われます。つまり自然の振る舞いをつぶさに観察しながら、信玄堤とか分流というような工夫で、相手と交流して力づくで対応していないということです。力づくということ言えば、国防というと戦争が思い出されるわけですが、いわば外交の失敗を力で回復させるというか補っているかのようにも見えます。それゆえに、戦争では敵も見方も幸せになることは生まれにくい、極めて悲惨な結果だけが重くのしかかるということになると思います。大きな自然災害で被害があると、必ず国土の強靱化が言われますが、何を強靱にするのかを考える必要があると思います。最近のように気候変動が激しく、これまでと異なる事象が発現しているときのこれまでのようにつぎはぎだらけのことをしていて意味があるのかどうかです。つまり、暮らし方や考え方に自然災害を呼び込むようなものが無かったどうかを忘れてはいけないと思います。経済性や利便性を優先して、自然との共生を置き去りにしていた結果ではないのかということを実感することが必要だと思います。

天災と国防は、一見対照的なあるいは無関係に見えるものでも、それへの対応という点では多くの共通点があるように思います。つまり、自己中心的なことで地球規模のことにかかわるうぬぼれがどこかに染み付いていないかどうか、すべてが科学技術だけで快適な生活が保障されるという神話に浸っていないかどうか。この地球に生まれてきた人間の新参加者が、目先のことでうぬぼれてしまっていないかどうか。

「天災は忘れたころにやって来る」は、やって来る前に対応すべきことは何か、来てからでは遅いこともある、招くような行為はせずにかわすことをせよ といわれているような気がします。